

半七捕物帳

夜叉神堂

岡本綺堂

青空文庫

これも例の半七老人の話である。但し自分はこの一件に直接の関係はなく、いわば請け売りのお話であるから、多少の聞き違いがあるかも知れませんが、前提をして老人は語る。

「今でも無いことはありませんが、昔は祭礼や開帳には造り物が出来たものです。殊にお開帳には必ず種々の造り物が出来て、それが一つの呼び物になったのですから、皆それぞれに工夫を凝らしたものです。その造り物は奉納で、無料見物の出来るように、諸人の眼に付くような場所に飾ってあるのもあり、又は普通の観

世物のように木戸銭を取って見せるのもありました。いずれにしてもお開帳に造り物はお定まりで、今度のお開帳にはどんな造り物が出来たとか云つて、参詣半分、見物半分で、みんなぞろぞろ押し掛けたのです。まじめな信心者だけでは、どこのお開帳もうまく行かなかつたと見えます。

文化九申年（さいる）の三月三日から渋谷（ちようこくじ）の長谷寺（ちようこくじ）に、京都（きよみや）の清水（きよみづ）観音の出開帳がありました。今のお若い方々からお叱言（ごうご）が出るといけませんから、ちよつとおことわり申して置きますが、長谷寺は有名なお寺で、今日ではその所在地が麻布区（まふ） 筈（つが）町（ちやう） 百番地（ひゃくばんち）といふことになっていますが、筈町（つがちやう）という町名は明治以後に出来たもので、江戸時代にはこの辺（こが）一帯を筈（つが）と呼び慣わして、江戸の切

絵図にも渋谷の部に編入してあります。そんなわけですから、ここでは渋谷としてお話をいたします。長谷寺が麻布にあることを知らねえかなぞと、どうぞお叱りのないように願います。

このお開帳は大そう繁昌しました。なにしろ京の清水といえは昔から有名であり、長谷寺も江戸では有名であり、しかも時候は三月の桜どきで、郊外散歩ながらの御参詣にはお誂え向きというわけですから、繁昌したのも無理はありません。例によつて奉納の造り物がいろいろ出来ました。そのなかでも評判になったのは五尺あまりの大兜かぶとで、鉢しころも鋳こぜにもすべて小銭を細かく組みあわせて作ったのです。これは珍しいと云うので大変な評判。これだけの兜をこしらえるには、何貫文の銭が要るだろうなぞと、余計

な算当をしながら見とれているものもある。

もちろん錢ばかりでは全体が黒ずんでしまつて、兜の色の取り合わせが悪いので、前立てや吹き返しには金銀の金物をまぜてありました。金物と云つてもやはり本物で、金は慶長小判、銀は二朱銀を用いていましたから、あの小判が一枚あればなぞと涎よだれを流して覗いているのもある。なにしろ金銀を取りまぜた大兜が、春の日にきらきらと光つていますのですから、参詣人の眼をおどろかしたに相違ありません。

この評判があまり高くなつたので、寺社方の役人も検分に來ました。たとい小錢にしても、天下通用の貨幣をほかの事に用いるのは、その時代には頗るやかましかつたのです。下手な細工をす

ると、国宝鑄潰いつぶしという重罪に問われます。今度の兜はただ組み合わせてあるだけで、別にお咎めを受けるほどの事でもなく、折角これだけに出来ているものを取りのけさせるのも如何いかがであるから、このまま飾り置くのは仔細ないが、金銀をまぜてあるのは穩かでない。小判と二朱銀だけは早々に取りのけると申し渡されました。

世話役の者共も恐れ入って、委細承知のお請けをしましたが、元来この造り物は、江戸の講こうちゆう中からの奉納ではなく、京都の講中の供え物でした。その前年、即ち文化八年の春、大阪西の宮で四十八年目の開帳があつた時に、境内に小屋を建てて種々の造り物を飾りましたが、そのなかには金銀又は錢を用いたものがあ

って、それが評判になったので、今度の兜もそれを真似たのです。西の宮の時には別にお差し止めの沙汰もなかったもので、今度も大丈夫だろうと多寡をくくって持ち出して来たところが、右の次第で金銀だけは取りのけろと云うことになった。金銀を外してしまつては、兜も光りを失うわけですが、どうも致し方がありません。それはまあそれとして、差しあたり困るのはその修繕です。前立てや吹き返しの金銀を取りのけて、小銭でその穴埋めをするといふのがむずかしい。京都の職人の細工ですから、その土地ならば早速に何とかなるのでしようが、江戸にそんな職人があるかどうか問題です。

兜をこしらえるのは兜師の職ですが、普通の兜師のところへ持

ち込んで、そんな細工を引き受ける筈はありません。金銀細工は銚屋かざりやの職ですが、これも普通の銚屋には出来ない芸です。と
いつて、折角評判になったものをただ引つ込めるのは残念でもあり、人気にもさわるので、講中の人達も頭を悩ました末に、役人
に対しては三日間の猶予を願ひまして、そのあいだに何とか工夫くふう
することになりました。その猶予は幸いに聴き届けられましたの
で、まずほつとしたのは三月十一日の夕方でした。

三日の猶予では京都から職人を呼び寄せることは出来ない。江
戸にそんな細工をするような職人が無いとすれば、金銀の穴は銅
か真鍮の延べ板で埋めてしまうのほかはないと、まずあらましの
相談を決めて、講中の世話役の人達は寺内に泊まるもあり、近所

の宿へ帰るもあり、昼間の混雑に引きかえて、春の宵は静かに更けて行きました。さあ、これからがお話で、夜が明けて見ると、その兜の前立てにならないでいる小判五枚と二朱銀五枚が紛失しているのです、みんなも胆きもを潰しました。二朱銀は知れたものですが、一方は慶長小判ですから、その頃の相場でも五枚で五十両ぐらいになります。十両以上の品を盗めば首の飛ぶ時代に五十両の盗賊、さあ大変と騒ぎ立てるのも無理はありません。

こう云うと、今の人はなぜ番人を付けて置かないのだ、さも無くば夜中は寺内に仕舞い込んで置けばいいと仰しやるに相違ない。そこが昔と今とは人情の違うところで、いくら悪い奴でもお開帳の奉納物を盗むなぞという事はあるまいと油断している。現に西

の宮の時には盗難もなかつたそうです。それでも江戸は生馬いきうまの眼をさえ抜く所だからと云うので、寺男がひと晩のうちに三度は見廻ることになっていて、寺男の弥兵衛が九ツと八ツと七ツ、即ちこんちの十二時と午前二時、四時の三度は、そこらの小屋を一巡して、奉納物に別条はないかと見まわる。その晩も暁あけ七ツに見まわつた時まで無事であつたと云うのですが、弥兵衛ももう年寄りですから、寝ごころのいい春の夜にうっかり寝込んでしまつたか、それとも初めから横着を極めて、ひと晩に一度ぐらしか起きて行かなかつたか、その辺はどうも判り兼ねます。

寺社方の指図で、忌いでも取り外さなければならぬ小判ではあるが、さてそれが紛失したとなつては大問題で、係りの者一同も

顔の色を変えて騒ぎ出しました。ともかくもその次第を寺社方へ訴え出ますと、役人の方では、それ見たことか、一体そんな不用心な物を飾って置くから悪いのだと叱り付ける。盗まれた上に叱られて、いや散々の始末。ひと先ずその兜を取り片付けて修繕に取りかかりました。

しかし寺社方の方でも叱ったばかりで済まされません。取りあえず町方まちかたに通知して、その盗難詮議を依頼することになりました。八丁堀同心の矢上十郎兵衛は麻布の御用聞きりゆうど竜土りゅうどの兼松を呼んで、その探索を命じる。兼松はもう五十二、三で麻布の竜土に住んでいるので仲間内では竜土と呼ばれていました。場末ではあるが、若い時から腕利きで知られた男です。渋谷といえ、も

うお江戸の部ではないのですが、こういう場合には江戸の町方が踏み込んで活動するほか無い。兼松は委細承知して帰りました」

二

兼松が竜土の家へ帰った頃には、三月十二日ももう暮れかかっていた。旧暦の三月であるから、きょうは朝から生暖かい風が吹いて、近所の武家屋敷の早い桜はもう散り始めていた。汗ばんだ襟のほこりを手拭でふきながら、兼松は格子をあけてはいると、子分の勘太が待っていた。

「親分、御苦勞でした。八丁堀の御用は長谷寺の一件じゃああり

「ませんかえ」

「むむ。ここらでももう評判になつてゐるか。察しの通り、銭ぜにの兜だ」と、兼松は長火鉢の前で一服吸いながら云つた。「今も八丁堀の旦那と話して来たのだが、おめえはあの兜を見たか」

「見ましたよ。奉納場に飾つてあるのだから、手を着けてみる訳にやあいかねえが、なにしろなかなか念入りの細工で……。江戸にあんな職人はありますめえ」

「おれは此の頃出不精になつたのと、年寄りのくせに後生ごしやうぎ気が薄いので、まだお開帳へ参詣をしなかつたが、それほど念入りに出来ている兜から小判五枚を引つpegがすのは容易じゃあねえ。恐らく素人の芸じゃあるめえ。金銀細工をする奴らだろう。かね

てから付け狙っているうちに、きのう寺社方からのお指図で、急にその小判を取り外すことになったので、奴らも慌ててゆうべのうち引つpegがしに来たのだらう。こっちの油断は勿論だが、奴らもなかなか抜け目がねえ。だが、勘太。こりやあ案外早く知れるぜ」

「そうでしうか」

「今も云う通り、寺社方からのお指図が出て、三日の猶予で落らくち着やくしたのはきのうの夕方だと云うじゃあねえか。世間ではまだ知る筈がねえ。それをすぐに覺つて仕事に来た以上、なにか内輪さぐくに係り合いのある奴に相違ねえ。そのつもりで探りさぐくを入れたら、手がかりが付きそうなものだと思ふが……」

「そうですね」と、勘太はうなずいた。「成程こりやあ内輪の機密を知っている奴らに相違ありません。好うござんす。そのつもりで探ってみましょう」

「まあ、おれも一緒に行ってみよう。どうでもう開帳は仕舞った時刻だ。ゆう飯でも食って、それから出かけよう」

二人は夕飯を食って、暮れ六ツを過ぎた頃から竜土の家を出た。その頃の麻布は大かた武家屋敷で、場末には百姓地もまじっていた。笄橋を渡って、いわゆる渋谷へ踏み込むと、ふださん普陀山長谷寺の表門が眼の前にそびえていた。寺は曹洞派のめいさつ名刹で、明治以後は大いに寺域を縮少されたが、江戸時代には境内二万坪にも近く、松、杉、桜の大樹が枝をかわして、見るから宏壮な古寺であった。

大きい寺には門前町があるが、ここにも門前の町屋まちやが店をならべて、ふだんも相当に賑わっているところへ、今度の開帳を当て込んで急拵えの休み茶屋や、何かの土産物を売る店なども出来たので、ここらは場末と思われない程に繁昌していた。開帳は夕七ツ限りであるから、参詣人はみな散ってしまった、境内はもうひっそりとしているが、門前町はまだ何かごたごたして、灯の明るい店では女の笑い声もきこえた。

兼松は桐屋という花暖簾をかけた茶店へはいった。

「まだ店はあるのかえ」

「どうぞお休み下さい」と、若い女が愛想あいそよく迎えた。

勘太もつづいてはいった。二人は床几に腰をかけて、茶をのみ

ながら開帳の噂をはじめた。

「今度は大当たりだそうだな」と、兼松は笑いながら云った。

「時候がいいのにお天気がよいので、たいそうな御参詣でございます」と、女も笑いながら答えた。「本所深川や浅草の遠方からも随分お詣りがあるようです」

「奉納物のなかで、銭の兜というのが評判だそうだが……」

「ええ。あの兜はほんとうに好く出来ていると云って、どなたも感心しておいでです」

「毎日飾ってあるのかえ」

「どういう訳だか知りませんが、それがきようは飾ってなかつた
そうで……。わざわざお出でになって、力を落としてお帰りにな

つた方かたもございます」

「なぜ引つ込ませたのだろう」と、勘太は空とぼけて訊いた。

「さあ、なぜでしょうか」と、女も首をかしげていた。「そのこととでいろいろの噂もあります……。何かお寺社の方からお指図があつたのだそうで……」

二人はいろいろにカマをかけて訊いてみたが、兜の金銀紛失のことは飽くまでも秘密にしてあるらしく、茶屋の者らも知らないようであつた。店もそろそろ仕舞いにかかる時刻に、いつまで邪魔をしてもいられないので、兼松は茶代を置いて表へ出ると、ひとりの女が摺れ違つて通りかかったが、また何か思い直したように引つ返して、寺の門をくぐつて行つた。

「あの女を知らねえか」と、兼松は訊いた。

「知りませんな」と、勘太は見送りながら答えた。「年ごろは二十五、六、小股の切れあがった、野暮でねえ女だが……。ここらの人間じゃありませんね」

「開帳だからいろいろの奴も来るだろうが、今頃あんな女が寺へはいるのはおかしい。まさかに坊主をたずねて来たわけでもあるめえ」

兼松に頤あごで指図されて、勘太はすぐに女のあとを尾つけて行くと、女は普陀山の額かぶをかけた大きい門をはいって、並木を横に見ながら急ぎ足にたどって行つた。物に馴れた勘太は並木のあいだを縫つて、覺あられないように忍んでゆくと、右側に夜叉神堂がある。

女はその石燈籠の前に立って、おぼろ月にあたりを見まわした。

長谷寺参詣の人は知っているであろうが、夜叉神堂はこの寺の名物である。夜叉神は石の立像りつぞうで、そのむかし渋谷の長者ちやうじやの井戸の底から現われたと伝えられている。腫れものに効験ありと云うのであるが、その他の祈願をこめる者もある。いずれにしても、ここに参詣する者は張子はりこの鬼の面を奉納することになつているので、古い面が神前の箱に充満している。何かの願掛けがんをする者は、まずその古い面をいただいて帰って、願望成就か腫物平癒のあかつきには、そのお礼として門番所から新らしい面を買つて奉納し、あわせて香華かうげを供えるのを例としている。その古い面は一年に二回焼き捨てるのであるが、それでも多数の参拝者があ

るために、鬼の面はいつでももう高く積まれていた。

女は幾たびか左右に眼をくばって、堂の前に進み寄ったかと思うと、やがて神前の大きい箱に手をさし入れて、古い鬼の面をかきのけているらしい。どうするのかと勘太は桜の木蔭こかげから窺っていたが、あいにく向きが悪いので、女の手もとは判らない。勘太は焦じれて木かげから少しく忍び出ると、女は勘が早かった。人の氣息のあるらしいことをすぐに覺つたと見えて、一枚の古い面を押し頂いて堂の縁に置いた。そうして、殊勝らしくひざまずいて礼拝した後、その面をささげて立ち去ろうとした。

「おい、姐さん」

勘太は姿をあらわして声をかけた。

「はい」

女は立ちどまった。その落ち着かない態度が勘太の注意を惹いた。

「おまえさん、何か探していたのかえ」

「夜叉神さまのお面をいただきに参りました」

「でも、なんだか箱のなかを引っかけ廻していたじゃあねえか」

「同じお面を頂きますにしても、あんまり古くないのを頂きたい
と思ひまして……」

「おまえの家はどこだえ」
うち

「麻布六本木でございます」

「商売は」

「明石^{あかし}という鮎屋で……」

「じゃあ、おまえは鮎屋のおかみさんだね」

「はい」

なんとという証拠もないので、勘太もその上に詮議の仕様もなかった。さりとしてこのまま放してしまうのも残り惜しいように思われるので、どうしたものかと思案していると、あとから来た兼松がずっと進み出た。

「おれはこの女の番をしているから、勘太、おめえはその箱のなかを調べてみる」

それを聞いて、女の様子が俄かに変わった。彼女は二人の間を摺りぬけて逃げ出そうとした。

「ええ、馬鹿をするな」と、兼松はうしろから女の帯をつかんだ。「こつちは男が二人だ。逃げられるなら逃げてみる」

それでも逃げてみようとするらしく、女は身をもがいて駈けだそうとした。そのはずみに掴まれた帯はゆるんで、帯に挟はさんでいたらしい何物かがかちりと地に落ちた。勘太が手早く拾ってみると、それは月に光る二朱銀であつた。

三

鮎屋の女房おぎんは、夜叉神堂を背景にして、吟味のひと幕を開かれた。彼女は品川の女郎あがりで、年明ねんあきの後に六本木の明

石鮎へ身を落ちつけたのである。

「亭主の清蔵とは勤めの時からの馴染なじみで、昨年から引き取られて夫婦になりました」と、おぎんは申し立てた。

「その清蔵が先月から左の足に悪い腫物を噴き出しまして、いまだに立ち働ぎが出来ません。職人任せでは店の方も思うように参りませんので、わたくしも心配して居りますと、それには長谷寺の夜叉神さまにお願い申すに限ると教えてくれた人がありましたので、昼間は店を明けるわけには参りませんから、夕方から御参詣にまいったのでございます」

「この二朱銀はどうしたのだ」と、兼松は訊いた。「女のくせに、二朱銀一つを裸で帯のあいだに挟んでいる筈はねえ。あの面箱の

中から探し出したのか」

「恐れ入りました。あの箱のなかの古いお面をさがして居りますうちに、二朱銀ひとつ見つけ出しました。大かた御信心の方が納めたのだらうと思ひまして、そのままにして一旦は帰りかけましたが、唯今も申す通り、亭主の病気で手元の都合も悪いものですから、これも夜叉神さまがお授け下さるのかも知れないと、手前勝手の理窟をつけまして……。御門前からまた引返してまいりまして、亭主の病気が癒りましたら、きつと倍にしてお返し申しますと、心のうちでお詫びを申しながら……。まことに濟まないことを致しました」

おぎんは泣き出した。亭主の病氣平癒の祈願に来ながら、勝手

な理窟をつけて、奉納の金をぬすみ去ろうとは、飛んでもない奴だと兼松も呆れた。しかしそれも浅はかな女の出来心とあれば、深く咎めるにも及ばないが、一体この女の申し立てが嘘か本当か、それさえも好くは判らないのであるから、兼松は油断しなかつた。「勘太。なにしろその箱をぶちまけてあらた検めてみる。銀のほか小判が出るかも知れねえ」

勘太は箱のなかの古い面を片端から掴み出すと、果たして箱の底から五枚の小判があらわれた。

「親分、ありましたよ」と、勘太は叫んだ。「猫に小判ということは聞いているが、これは鬼に小判ですぜ」

「おれもそんな事だろうと思つた」

兜の金銀をぬすんだ奴は、自分のふところに納めて置くことを避けて、ひと先ずこの面箱のなかに押し隠したらしい。おぎんもその同類で、参詣をよそおつてそつと取り出しに來たのか、あるいは偶然に二朱銀を見つけ出したのか。その申し立ての真偽がまだ判然はつきりしないので、ひと先ずおぎんを門番所へ連れて行つて、取り逃がさないように監視を申し付けて置いた。

「仕方がねえ。こうなつたらここで見張りだ。今夜じゆうには來るだろう」

「親分の夜明かしは御苦勞ですね。家うちへ歸つて誰か呼んで來ましようか」と、勘太は云つた。

「まあいいや。この頃は暑くなし、寒くなし、月はよし、まだ藪

ツ蚊も出ず、張り番も大して苦にやならねえ。おめえといちれんたく一蓮
托しよう生だ」

兼松は笑いながら、勘太と共に夜叉神堂のうしろに隠れた。人ひ
目とめを忍ぶ身には煙草の火も禁きんもつ物である。まして迂闊ぎようにしゃべる
ことも出来ないので、二人は無言の行ぎように入ったように、桜の蔭に
しゃがんで黙っていた。

夜明かしを覚悟していた彼等は、幸いに早く救われた。その夜
もまだ四ツ（午後十時）を過ぎないうち、一つの黒い影が夜叉神
堂の前にあらわれた。自分の顔を見られぬ用心であろう。その曲
者は奉納の鬼の面をかぶっていた。まだ其の上にも用心して、彼
は手拭を頬かむりにして其の頭を包んでいたが、それが坊主頭で

あるらしいことは、兼松らに早くも覺られた。

曲者は面の箱をひき寄せて、なにか一心にさぐっているらしい。その隙をみて、二人は不意に飛びかかると、彼はもろくも其場に捻じ伏せられた。手拭を取られ、鬼の面を剥はがれて、その正体をあらわした彼は、二十五、六歳の青白い僧であつた。

「この坊主め、生けツぷてえ奴だ」と、兼松は先ず叱りつけた。

「ないしんによやしや内心如夜叉 どころか、夜叉神の面をかぶつて悪事を働きやがる。貴様は一体どこの納なつしよ所坊主だ。素直に云え」

普通の出家の姿であつたならば、なんとか云い訳もあつたかも知れないが、頬かむりをして、鬼の面をかぶっていたのでは、どうにも弁解の法がない。彼も一も二もなく恐れ入ってしまった。

彼はこの近所の万隆寺の役僧教重であつた。諸仏開帳の例として、開帳中は数十人の僧侶が、日々参列して読経どきようこ鉦鼓しょうこを勤めなければならぬ。しかも本寺から多勢たせいの僧侶を送つて来ることは、道中の経費その他に多額の物入りを要するので、本寺の僧はその一部に過ぎず、他は近所の同派の寺々から臨時に雇い入れることになつてゐる。万隆寺の僧も今度の開帳に日々参列してゐたが、教重もその一人で、破戒僧の彼は奉納の兜に眼を着けたのである。

彼も別に悪僧というのでは無かつたが、いわゆる女犯によぼんの破戒僧で、ながそで長袖の医者ながそでに化けて品川通いに現うつつをぬかしてゐた。誰も考えることであるが、あの兜の小判があれば当分は豪遊をつづけ

られる。その妄念が増長して、彼は明け暮れにかの兜を睨んでい
るうちに、寺社方の指図として兜の金銀は取りのけられることにな
った。それが彼の悪心をあおる結果となつて、この機を失つて
は再び手に入る時節がないと、教重はゆうべ思い切つて悪事を断
行したのであつた。

他寺の僧ではあるが、日々この寺に詰めているので、彼は寺男
の弥兵衛が奉納小屋を見まわる時刻を知つていた。弥兵衛が暁あけ
七ツの見まわりを済ませた後、彼は鑿のみと槌つちとをたずさえて小屋の
内へ忍び込んだ。金や銀は巧みに組み合わせてあるので、定めて
面倒であろうと思ひのほか、一枚をこじ放すと他はそれからそれ
へと容易に剥がれた。元来は小判を盗むのが目的であつたが、仕

事が案外に楽であつたので、彼は更に二朱銀五、六個を剥ぎ取つた。

そのときにも彼は自分の顔を隠すために、夜叉神堂の古い面をかぶっていた。

四

「どうです、親分。これだけ判つたら面倒はねえ。あとは門番所へ連れて入つて、ゆつくり調べようじゃありませんか」と、勘太は云つた。

彼は宵からの張り番に少しく疲れたらしかつた。

「じゃあ、ひと休みして調べるか」

二人は教重を引つ立てて門番所へ行つた。門番の老爺おやしが汲んで出す番茶に喉を湿しめらせて、兼松は再び詮議にかかった。

「お前はゆうべ此の寺じちゆう中に泊まったのか」

「いいえ、自分の寺へ帰りました」と、教重は答えた。「けさの七ツ過ぎに寺をぬけ出して、ここへ忍んで来ました。夜なかに往來をあるいていると、人に怪しまれる、明け方ならば何とか云いわけが出来ると思つたからです」

「盗んだ小判をなぜすぐに持つて帰らなかつたのだ」

「小判と二朱銀を袂に忍ばせて、奉納小屋を出ますと、まだ誰も起きていないので、あたりはひっそりしていました。わたくしは

安心して夜叉神堂の前まで来まして、かぶっている鬼の面を取ろうとしますと、この頃の生暖かい陽気で顔も首筋も汗びっしりになっていきます。その汗が張子の面に滲にじんで、わたくしの顔にべつたりと貼り着いたようになって、容易に取れないのでございませぬ。わたくしは昔の肉付き面を思い出して、俄かにぞつとしました。嫁を嚇かしてさえも、面が離れない例もある。まして仏前の奉納物を毀して金銀を奪い取つては、神仏の咎めも恐ろしい。あるいは夜叉神のお怒りで、この鬼の面がとれなくなるのでは無いかと思うと、わたくしはいよいよ総そうみ身にひや汗が流れました」

腹からの悪僧でもない彼は、その当時の恐怖を思い泛かべたように声をふるわせた。

「多寡が胡粉ごふんを塗った張子の面ですから、力まかせに引きめくれば造作ぞうさくもなしに取れそうなのですが、それがわたくしには出来ませんでした。そこで夜叉神の前に頭をさげて、わたくしは心から懺悔をいたしました。そして、盗んだ金銀を元のところへ戻しに参ろうと存じまして、暫く祈念いたして居りますと、不思議にその面が取れました。やれ有難やと喜んで、再び奉納小屋の方へ引つ返そうと致しますと、この頃は夜の明けるのが早くなったのと、開帳中は特に早起きをいたしますので、寺中ではもう雨戸を繰るような音がきこえます。わたくしは急に気おくれがして、もし見付けられたら大変だと思ひまして、小屋へは引つ返すのをやめました。袂の金の始末に困りました。むやみに其処らへ捨て

て行くわけにも行かず、当座の思案で小判五枚を面の箱へ押し込みました。こうして置けば、夜叉神の功力くりきで何とか元へかえる術すべもあろうかと思つたからでございませう。一旦かぶつた面は、自分が一生の戒めにするつもりで、袂に入れて帰りました」

このときの教重は確かに懺悔滅罪の人であつた。小判と共に二朱銀も戻した積りであつたが、寺へ歸つてみると、五個の銀が袂に残つていた。彼は慌ててそれだけを持ち歸つたのである。飛んだ事をしたと悔んだが、今さら引返すわけにも行かないので、彼は素知らぬ顔をして朝飯を食つて、ほかの役僧らと共に長谷寺へ参列した。

兜の一件は、世間にこそ秘していたが、寺中にはもう知れ渡つ

ていたので、その噂を聴くたびに教重はひやひやした。慈悲柔らかな観音の尊像も、きようは自分を睨んでおわすかのように思われ、彼が読経の声はみだれ勝ちであつた。それに付けても、心にかかるのは彼かの二朱銀五個の始末である。小判だけを戻したのでは罪は消えない。小判でも二朱銀でも一文銭でも、仏の眼から観れば同様で、たとい二朱銀一個でも、それを着用している以上、自分の罪は永劫に消えないのである。彼は今夜にもそれを戻そうと決心した。

仏の前に懺悔をしても、自分の罪を人間の前にさらすことを恐れた教重は、前夜と同じように、手拭をかぶり、鬼の面をかぶつて、再び夜叉神堂へ忍び寄つたのである。すでに懺悔をしている

以上は、鬼の面の貼り付くおそれはないと彼は信じていた。

この告白を聞かされて、兼松も勘太も少しく^{あて}的がはずれた。

「それじゃあ、おめえはその二朱銀を返しに来たのかえ」と、兼松は念を押した。

「はい。この通りでございます」と、教重は袂から二朱銀を出して見せた。

隠した金を取り出しに来たならば、わざわざ二朱銀五個を袂に入れて来るはずもない。まったく彼は盗んだ金を返しに来たのであった。そう判ると、兼松らもこの若い僧を憎めないような気にもなった。

夜叉神の咎めか、あるいは彼の良心の咎めか、肉付きの面のむ

かし話にも似たような、一種の不思議を見た為に、彼は今も張子の鬼の面の前に悔悟の涙を流しているのであつた。更に不思議と云えば云われるのは、彼が小判と共に二朱銀一個を面箱のなかに押し込んで去つたことである。彼は何分にも慌てていたので、小判五枚は確かにおぼえていたが、二朱銀は五個か六個かはつきりとも記憶していなかつた。したがつて、二朱銀は全部持ち帰つたものと思つていたのであるが、その一個は面箱のなかに落ちていて、偶然にもおぎんに発見されたのである。

おぎんもこの二朱銀を発見しなければ、単に古い面を持ち帰るに過ぎなかつたであらう。二朱銀を発見した為に、おぎんは兼松らに捕えられ、更に箱の底から小判五枚を発見され、又それがた

めに教重も捕えられることになったのである。老練の兼松もここへ来るまでは、別にこれという成案もなかった。おぎんに眼を着けたのが彼の手柄でもあるが、それとても実はまぐれあたりを過ぎない。所詮は面箱のうちに忍んでいた二朱銀一個が、手引きをしてくれたのであった。

「まったく神の業わざです」と、教重がいよいよ恐れたのも無理はなかった。

この時、奥の障子をあけて、女の白い顔があらわれた。それは先刻から門番所に預けられていたおぎんであった。彼女は薄暗い行燈のひかりに教重の顔をのぞきながら云った。

「あら、やっぱりお前さんだったの。どうも聞き覚えのある声だ

と思つたら……。お前さん、まだ道楽をやめないで、とうとう大変な事を仕出来しでかしたのねえ」

教重は蒼い顔を俄かに赤くした。

彼はおぎんが品川に勤めている頃の馴染であつた。

「この坊さんは斯う見えても、なかなか口がうまいので、あたしばかりじゃあ無い、大勢の女が欺されたんですよ」

なにか昔の恨みがあると見えて、おぎんは遠慮なしに畳みかけるので、教重はいよいよ赤面した。兼松も勘太も笑い出した。

「そんなに弱い者いじめをするなよ」と、兼松は云つた。「二朱銀一つだつて、ちよろまかせば罪人だが、今夜のところは眼こぼしにしてやる。早くうちへ歸つて、亭主の看病でもしろ」

「はい、はい。ありがとうございます」

おぎんは喜んで帰った。

悔悟している教重を寺社方へ引き渡すのも可哀そうだと思つて、兼松は寺の役僧や開帳の世話人らに内分の計らいを云い聞かせるど、彼等も異議なく承知した。こんなことが世間に知れ渡ると、寺の迷惑にもなり、開帳の人気にもさわるからである。小判と二朱銀は夜叉神堂から発見されたが、その盗賊は知れないと云うことに発表された。

それに尾^{おひれ}鱗を添えて、こんな噂をするものが出て来た。

「兜の小判や二朱銀をぬすんだ泥坊は、夜叉神堂の前まで来ると、急に体がすくんで動けなくなったので、盗んだ金をお堂の縁に置

くと、再び歩かれるようになったそうだ」

奇を好む江戸人は眼を丸くして、その噂に耳をかたむけた。それが一種の宣伝になって、長谷寺の開帳はますます繁昌した。夜叉神堂には線香のけむりが充満して、鬼の面は大勢の手に押しいただかれた。

万隆寺の教重は無事に開帳六十日間を勤めたが、その後しも下う総さの末寺に送られたと云う。

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（六）」 光文社文庫、光文社
1986（昭和61）年12月20日初版1刷発行

入力：tat_suki

校正：小林繁雄

1999年4月30日公開

2004年3月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

半七捕物帳

夜叉神堂

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>